

大学生の職業観と職業不決断

——尾高（1941）による職業の定義に基づいた職業観の把握——

“Shokugyo-kan” as Defined by Odaka (1941) and Career Indecision in Undergraduates

浦上昌則

Masanori URAKAMI

要約

本研究は尾高（1941）による職業の定義を用い、職業観を、経済的側面、個人的側面、社会的側面を持つ職業に対する重要性の認識ととらえ、大学生の職業観を把握することを目的のひとつとした。またこの職業観が職業不決断とどのように関連しているかについて探索的に検討した。大学生1138名からの回答を対象として分析を行った結果、職業観の3つの側面に対する重要性のバランスから8つのタイプを導くことができた。そして大学生の職業観は、主たるタイプが存在するのではなく、多様なタイプが混在していることが示唆された。また職業観のタイプは職業不決断と関連していることが示唆された。そして経済的側面の値が他の2側面より高い職業観を持つ場合は不決断傾向が強く、3つの側面の値が同程度である場合、もしくは経済的側面の値が他の2側面より低い場合は、不決断傾向が弱くなる傾向が認められた。

問題と目的

久世（2000）は、青年期は「成人社会の一成員として権利を行使し、義務を果たすことのできる人格的成熟に達する準備期間」と述べている。そして個人と社会の関わりにおいては職業が重要な役割を果たすため、職業選択に対する準備およびその選択は青年期の大きな課題である。職業選択にかかる研究は従前より多くなされてきたが、中でも職業観という概念は、進路指導、キャリア教育の文脈において重視され、近年ではさらに注目度が増しているようである。ところがこの概念については、以前から多義性やあいまいさが指摘されているものでもある（たとえば広井, 1962; 梅澤, 2008; 浦上, 2010など）。そこで本研究では、尾高（1941）による職業の定義を用いることで大学生の職業観を把握することを試みる。さらに、職業観による個人のタイプ分けを行い、職業観と職業不決断の様相との関係を探索的に検討することを目的とする。

職業と価値観の関連について取り上げられるようになったのは、1950年代後半からとされる（広井、1962）。そして、職業観という概念は当初より多様に用いられていたようである。広井は1962年に、職業価値観¹⁾に関する研究を概観しているが、職業観という概念は様々な意味に使われていると指摘し、職業観研究を①職業認知のしかたとしての職業観、②生活全般への価値観のひとつの表明としての職業観（人間の全生活行動内における職業の位置づけ、価値づけ）、③職業の社会的価値評価としての職業観、④職業が個人に対してもつ直接的な有用性に対する価値意識としての職業観、の4つに分類している。そして広井は、職業観は様々な意味に使われているため、このような言葉は廃止して、「1) 対象を鮮明にさせるような、2) 個人の意識内容を明確に限定した」（広井、1962）用語を用いるべきではないかと提言している。

この広井（1962）の提言からすでに半世紀が経過するが、実際はこの提案のような方向には進まず、現在でも多様性を含んだまま用いられているといえよう。たとえば、国立教育政策研究所生徒指導研究センターの報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（2002）では、職業観を「人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識である。『職業観』は、人が職業そして職業を通じての生き方を選択するに当たっての基準となり、また、選択した職業によりよく適応するための基盤ともなるべきものである（平成4年「文部省進路指導資料」）。ここでいう『価値的な理解』とは、世の中にはどんな職業があり、それぞれの職業ではどのような仕事をし、どんな専門的な資質・能力が必要なのかなどについての知識・理解をもとに、自分はどの職業にどんな働きがいや誇りを見いだそうとするのか、あるいは、生きていく上で職業にどのような意味づけを与えていくかということである」としている。これは広井（1962）の指摘する4点をすべて含むような広義の定義といえよう。

このように、職業観という用語は一般的には多様な意味を含むものとして用いられている。しかし職業観をこのように定義すると、それを研究の俎上にのせることは難しくなると指摘せざるを得ない。近年発表されている職業観に関する研究を概観すると、そこで用いられている職業観は先の報告書（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）にあるような多様な意味を含む広義の職業観ではない。研究ごとに異なった職業観のとらえ方をしており、いわば狭義の職業観をそれぞれの研究で規定している。さらに、たとえば松本（2008）は測定しようとする職業観を広井（1962）の分類でいう④としてとらえているが、このように、広義の職業観の中に、その研究で捉えようとする狭義の職業観を位置づける言及のあるものは少数である。広井の指摘した課題は、半世紀たった現在でも解決されていないといえよう。

この課題は職業観に関わる研究にとっても、またキャリア教育にとっても重要性が高いと考えられる。そのため、将来的には用語の整理が不可欠といえよう。とはいえ、半世紀にもわたって慣例的に使用されていたものに別の呼称を与えることは、混乱を招きかねないし本研究の目的を超えてしまう。そこで本研究では、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）が指摘するような職業観を広義の職業観と位置づけ、その中のどの部分に着目するかを明確にした上で「職業観」という用語を利用することとした。

本研究でいう職業観は、広井の分類による①、すなわち職業認知の観点を特に重視する。たとえば梅澤（2008）は、近年のキャリア教育に関する代表的な書籍や報告書においても、職業とは何か

1) 広井（1962）はその研究の中で、「価値感」という表記を用いているが、本稿でこれに言及する際には、現在一般的に使われている価値観という表記に修正している。

については説明されていないと指摘し、職業に対する無理解が、就職活動や人生における様々な問題のもとになっていると述べている。また浦上（2008, 2010）は、キャリアや職業に関する問題の背景に、それらと密接な関係にある社会や個人といった概念の未整理があるのではないかと指摘している。これらはいずれも職業という概念に対する認知に関わる問題の指摘といえよう。それゆえ青年の職業認知にかかる職業観について探究することは、職業選択に対してはもちろん、かれらの社会観の理解にも有用な示唆を与えてくれるものと考えられる。

さて、前述の梅澤（2008）も浦上（2008, 2010）も、尾高（1941）が行った職業に対する定義に着目して論を進めている。そこで本研究もこれにならい、尾高の定義から職業認知にアプローチしたい。尾高は、職業とは何かということに一義的な規定を行うことは困難であるとしながらも、大きく3種類の見解があることから、「職業とは個性の発揮、連帯の実現及び生計の維持を目指す」という「人間の継続的な・行為様式である」と、3つの要素を含んだ定義を行っている。この3要素を彼の記述にそって簡単にまとめると次のように表現できよう。(1) 経済的側面：勤労の代償として生活のための収入を得る。(2) 個人的側面：（適材適所の考え方により）個性をいかし社会に寄与する。(3) 社会的側面：社会の構成員として、分担する役割を果たす。そして尾高は、これらの要素の間の関係が調和的である場合に、職業は理想形態となると指摘する。さらにその調和が崩れる場合もあるが、いずれかの要素がなくなるような場合は想定されておらず、そのような場合は職業ではないと述べている。本研究では、職業については以上の尾高（1941）による定義を採用する。藤本（1991）など、この定義に賛同しない立場もあるが、職業には先の3要素が含まれるとして検討を進めたい。

では、職業というものを尾高（1941）のようにとらえるとすれば、職業認知としての職業観とはどのようなものを指すことになるであろうか。尾高（1941）は、事実と観念を区別しなければならないとし、職業は行動様式、生活様式であり、職業観はその反映であると指摘している。また「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）においては、「一般に『〇〇観』は、外界とのかかわりを通して個人の内面に形成されるものであって、対象とする事柄を、自己に引きつけ自分自身の問題として考えるところに成立するとされる」と述べられている。すなわち尾高（1941）による職業の定義を採用することによって、職業認知としての職業観は、3要素を持つ職業というものに対する個人の考え方ということが出来る。

ところが、「考え方」という言葉もかなり幅広い意味を持つ。これは、「考え方」の解釈に多様性があることを反映したものと考えられる。しかし、職業観は価値観の一側面と考えられ、また価値観は一般的に「望ましさ」や「重要性」に関する概念ととらえられている（たとえば大山、1990）。そこで本研究では、これを重要性という視点からとらえることとする。

以上のような検討から、本研究では職業認知としての職業観を、職業の持つ経済的側面、個人的側面、社会的側面に対する重要性の認識と考える。職業はこの3側面を備えたものであるため、重要性の判断もそれぞれの要素に対応したものがあろう。それゆえ職業観は、3つの側面それぞれに対する重要性の認識の程度としてとらえることができ、さらに3つの重要性のバランスからいくつかのタイプを導くことができよう。本研究では、このようにして職業認知としての職業観を把握し、大学生の職業観の様相を記述することを目的とする。なお、本研究ではこのようにしてとらえられる職業認知としての職業観のことを「職業観」とよび、広義の職業観のひとつの構成要素と位置づける。

さらに本研究では、職業観が大学生の職業不決断とどのような関連を持つのかを探索的に検討する。職業選択は青年期から成人期への移行にも関わる重要な課題であるため、それを前に立ちすくんでしまうことは望ましくない。このような問題については、Williamson (1939) や Crites (1981) など従前より問題視されて検討が重ねられてきた（その経緯に関しては、清水 (1983)、清水・花井 (2008)、若松 (2012) などに詳しい）。清水 (1983) は、進路を決めるという活動にコミットメントすることができないという心理的状态あるいは傾向性を「不決断」よんでいる。職業選択をひかえた大学生にとって、この不決断の程度が高いことは望ましくない。梅澤 (2008) や浦上 (2008, 2010) の指摘を踏まえると、職業観は職業不決断と関連していると考えられる。そこで、職業観が職業不決断とどのように関連しているのかについて探索的に検討する。

方法

調査時期および対象

東海、関西地方にある7つの大学で、学部生を対象に2010年5月から7月にかけて調査を実施した。授業等において質問紙を配布し、説明と協力の依頼を行い、その場もしくは後日に回収を行った。なお質問紙は無記名であり、調査への協力は任意であった。

調査内容

職業観 尾高 (1941) に従い、経済的側面、個人的側面、社会的側面のそれぞれに対して2項目を準備した。経済的側面については、「私にとって職業は、私の望む生活をするために必要なお金を得るために重要である」と「私にとって職業は、生計を立てるために重要である」、個人的側面については「私にとって職業は、私の持っている力を発揮する場として重要である」「私にとって職業は、自分の知識や技能を活用できる場所として重要である」、社会的側面については、「私にとって職業は、社会の一員として自分の役割を果たすために重要である」、「私にとって職業は、社会に貢献する手段として重要である」という項目を準備した。これら6項目に加え、「私にとって職業は、自分を成長させるために重要である」など6つのダミー項目を加えた12項目を用い、「まったくそうは思わない」「少しはそう思う」「わりとそう思う」「かなりそう思う」「強くそう思う」の5段階で回答を求めた。

職業不決断 就職先の選択に対する心理的不決断傾向を把握するために、清水・花井 (2008) のキャリア意思決定尺度を用いた。これは、清水らによって検討が進められてきた尺度であり（花井・清水, 2006; 清水・花井, 2007）、下山 (1986) や清水 (1989) など複数の先行研究結果を参考にして作成されたものである。「葛藤」、「相談希求」、「不決断」、「モラトリアム」、「決定不安」、「逃避」、「障害不安」の7因子構造であり、各5項目で構成される。回答は、「そう思う」から「そう思わない」の4段階で求めた。なお参加者には就職内定者も含まれたが、内定者はこの項目には回答しなくてよい旨を実施時に教示した。

属性等 回答者の属性に関して、学部・学科、学年、性別、年齢について回答を求めた。

なお、本研究の分析には、主としてR (2.15.1) およびpsychパッケージ (1.2.8) を用いた。 χ^2 検定のみjs-STAR 2012 (2.0.2j) を利用した。

結果

調査対象の属性

分析には、就職の内定先を得ていない者の回答で、職業観、職業不決断の項目に対して欠損値等のないもののみを用いた。さらに、わずかではあるが年齢の高い回答者が含まれていたため、便宜的に18歳から26歳までの回答者を分析対象とした。このような条件に合う回答は1138名分であった（男性463名、女性675名）。対象の学年、所属等の概略をTable 1に示す。なお、表中の「文系」には、人文学、社会科学系などの学部・学科が含まれ、「理系」には理学、工学、情報系などの学部・学科が含まれる。また特定の職業との関連が強い、教員養成を主とした「教育」、「看護」については、文理系とは別に示した。

Table 1 回答者の属性

所属・専攻	人数	性別		学年			
		男	女	1年	2年	3年	4年
文系	649	217	432	313	227	63	46
理系	240	185	55	49	164	10	17
看護	92	0	92	92	0	0	0
教育	157	61	96	58	0	95	4
合計	1138	463	675	512	391	168	67

職業観についての基礎分析と分類

まず、職業観の3側面の測定指標について検討する。それぞれの側面に対して2項目を準備し、合計6項目を用いた。これら6項目間の相関係数はTable 2に示す通りである。それぞれの側面を構成する2項目の相関係数は.642から.700であり十分に高いものといえよう。また他側面の項目との相関係数は高くても.4台であり、同一側面間の相関係数よりも低い値であった。この結果を踏まえ、それぞれの側面の指標として、2項目の合計得点を算出して用いることとした。それぞれの側面の度数分布、平均値および標準偏差、並びに側面間の相関係数をTable 3に示した。経済的側面は他の2側面とほぼ独立しているといえるが、個人的側面と社会的側面には中程度の正の関連が認められる。

次に、これらの職業観3指標を用い、ユークリッド平方距離、Ward法によるクラスター分析を行い、調査対象を職業観でタイプ分けすることを試みた。デンドログラムの形状およびいくつかのクラスター数を比較し、それぞれのクラスターの特徴が職業観のタイプとして明確になる8つにまとめた。

8つのクラスターそれぞれの基礎統計量をまとめたものがTable 4である。またその様相をFigure 1に示す。なお、図中の箱の部分の下辺は第1四分位点、上辺は第3四分位点、内部の横棒は中央値を示す。上下の線の先端は、たとえば上側なら、第3四分位数から四分位範囲の1.5倍以内にあるデータのうちの最大値を示し、それよりもさらに外側にあるデータは「○」でプロットされる。

Table 2 職業観 6 項目間の相関係数

		3	8	2	12	5
経済的	3. 私にとって職業は、私の望む生活を するために必要なお金を得る ために重要である。	—				
	8. 私にとって職業は、生計を立て るために重要である。	.662 **	—			
個人的	2. 私にとって職業は、私の持っている 力を発揮する場として重要である。	.126 **	.064 *	—		
	12. 私にとって職業は、自分の知識 や技能を活用できる場所として 重要である。	.071 *	.063 *	.642 **	—	
社会的	5. 私にとって職業は、社会の一員 として自分の役割を果たすために 重要である。	.027	.057	.441 **	.428 **	—
	11. 私にとって職業は、社会に貢献 する手段として重要である。	-.030	-.013	.410 **	.471 **	.700 **

注) * は 5%水準, ** は 1%水準で有意であることを示す。

Table 3 職業観得点の基礎統計量と相関係数

	度数分布									平均値	標準偏差	側面間の相関係数	
	2	3	4	5	6	7	8	9	10			経済的	個人的
経済的	5	7	37	46	138	139	253	196	317	8.06	1.76	—	
個人的	13	24	99	117	216	195	214	124	136	6.97	1.93	.099 **	—
社会的	36	31	158	130	199	177	188	100	119	6.57	2.09	.011	.521 **

注) ** は 1%水準で有意であることを示す。

次に、それぞれのクラスターの特徴を概観してみたい。なおこの際の視点として、デンドログラムの形状や 3 側面間の得点バランス、全体平均との比較などから特徴を記述していく。

まずデンドログラムの形状より、これら 8 つのクラスターは、大きく、1, 2, 3, 7 と 4, 5, 6, 8 の 2 つに分かれる。この間には、個人的側面と社会的側面の得点が関係しており、それらが低めのグループが 1, 2, 3, 7、高めが 4, 5, 6, 8 と考えられる。1, 2, 3, 7 のグループは、さらに 2 と 7, 3 と 1 に分かれる。4, 5, 6, 8 のグループは、8 と 4, 5 と 6 に分かれていた。

このような様相を踏まえながら、クラスターの特徴について記述を行っていく。まず特徴的なのはクラスター 8 (129 名, 11.3%) であろう。3 側面すべてにおいて平均値が高く、すべて 8 点以上で同程度である。すなわち、すべての側面に重要性を高く認めているという特徴をもつタイプといえる。このクラスターと類似性の高いものがクラスター 4 (221 名, 19.4%) であり、各側面の得点はクラスター 8 より 1, 2 点低いが、3 側面の間での差は少ない。なおこのクラスターの各側面、特に個人的側面および社会的側面の得点は、全体の平均点より高めである。また最も人数の多いク

Table 4 各クラスターの基礎統計量

クラスター番号 (人数)	側面	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値	レンジ	全体平均との差
1 (218)	経済的	7.57	0.78	8	5	9	4	-0.49
	個人的	5.14	1.14	5	2	7	5	-1.83
	社会的	5.35	1.40	5	2	9	7	-1.22
2 (79)	経済的	9.00	0.96	9	7	10	3	0.94
	個人的	8.13	1.09	8	6	10	4	1.17
	社会的	4.10	1.03	4	2	6	4	-2.47
3 (82)	経済的	9.73	0.47	10	8	10	2	1.67
	個人的	4.62	1.38	5	2	6	4	-2.35
	社会的	3.55	0.93	4	2	5	3	-3.02
4 (221)	経済的	8.21	0.92	8	6	10	4	0.15
	個人的	8.04	1.08	8	5	10	5	1.08
	社会的	7.50	1.09	7	5	10	5	0.93
5 (114)	経済的	5.31	0.96	6	2	7	5	-2.75
	個人的	6.32	1.63	6	3	10	7	-0.65
	社会的	5.25	1.32	5	2	7	5	-1.32
6 (121)	経済的	5.55	1.22	6	2	7	5	-2.51
	個人的	8.00	1.55	8	4	10	6	1.04
	社会的	8.71	0.97	9	6	10	4	2.14
7 (174)	経済的	9.67	0.47	10	9	10	1	1.61
	個人的	6.41	1.26	7	3	8	5	-0.56
	社会的	6.68	1.04	6.5	5	10	5	0.11
8 (129)	経済的	9.57	0.67	10	8	10	2	1.51
	個人的	9.36	0.70	9	8	10	2	2.40
	社会的	9.47	0.66	10	8	10	2	2.90

注) 全体平均との差は、全体平均からスラスターの平均を減じている。

クラスターであった。このクラスター4よりもさらに得点が低く、また3側面の間での差が少ないという特徴をもつのがクラスター5(114名, 10.0%)といえよう。いずれの側面にもあまり価値を置いていない対象者がまとまったクラスターと考えられる。

次に特徴的なのはクラスター6(121名, 10.6%)であろう。多くのクラスターで、3側面の値は経済的側面が他より高めであり、全体の平均値でもそのような結果が示されているが、このクラスターは経済的側面が最も低い。経済的側面よりも個人的側面、さらにそれ以上に社会的側面に価値を置くクラスターといえる。

残る4つのクラスターはいずれも経済的側面の得点が他よりも高いという類似性が認められる。中でも他の側面に比べ、経済的側面のみが高いという特徴を示すのがクラスター3や7である。経済的側面と他の2側面との差がより大きいのがクラスター3(82名, 7.2%)、それよりは小さい場合がクラスター7(174名, 15.3%)である。

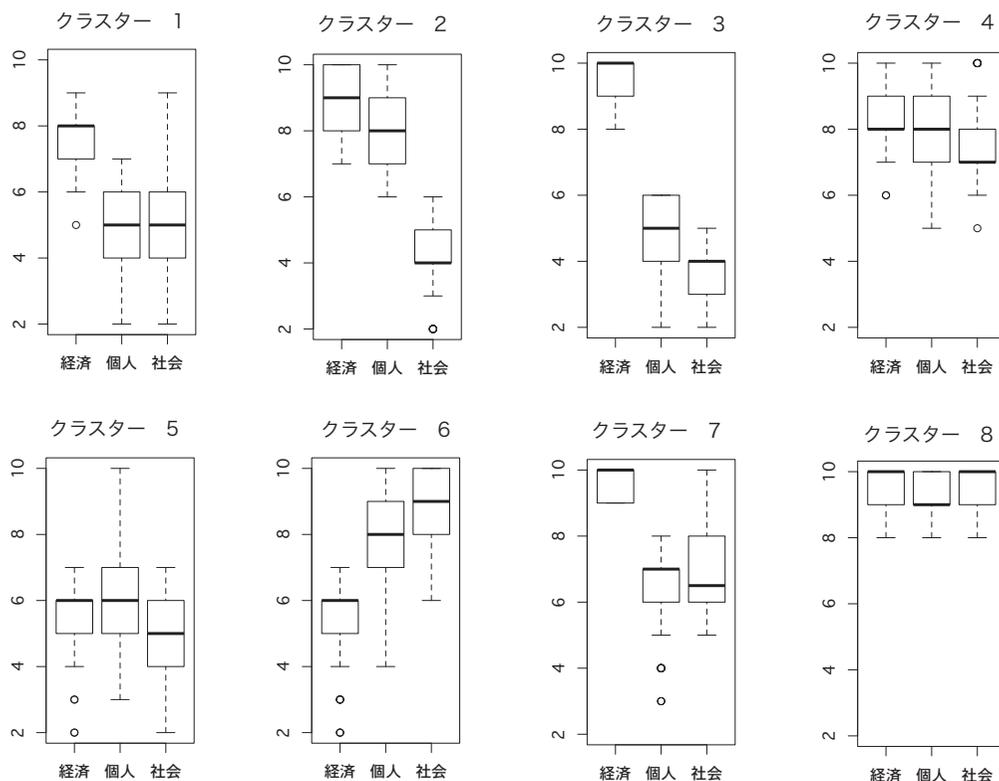


Figure 1 クラスターごとの職業観3側面の得点分布

クラスター2 (79名, 7.0%) は、経済的側面および個人的側面の値が高く、社会的側面だけが低いという傾向を示す。経済的側面と社会的側面の値はクラスター3に近いが、個人的側面の値がかなり高いところに特徴がある。なお、このクラスターが最も人数が少ない。

さらにクラスター7に類似してはいるが、すべての側面で1, 2点得点が下がっているものがクラスター1 (218名, 19.2%) である。その得点は平均点のパターンに近いが、いずれも若干それを下回る。クラスター5ほどではないが、全体的に職業に価値を置いていない対象の集まりと考えられる。

次に、専攻別に職業観をまとめた。Table 5に、専攻別の各クラスターの人数を示す。人数の少ないセルが含まれるため統計的手法を用いた検討は十分に行うことができないが、文系と理系は比較的類似した人数の分布であるのに対して、看護や教育を専攻する大学生は、文系や理系の学生とは多少異なっているといえよう。看護や教育を専攻する者が少なかったクラスターに共通する点は、概ね社会的側面に対して価値を認めない点にある。看護職や教育職は職業の中でも社会的性格が強いといえ、それゆえこれらの専攻を選んだ者の中には、そもそも社会的側面に対して価値を認めない者の絶対数が少ないとも考えられる。この点は今後の検討課題といえよう。

なお、各セルに十分な人数が認められる文系と理系のみを用いて χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りは認められなかった ($\chi^2=11.71$, $df=7$, ns)。さらに性差については、男女ともに十分な

対象者数がある文系のみを用いて検討した (Table 5)。 χ^2 検定を行ったところ、1%水準で有意な偏りが認められ ($\chi^2=20.36, df=7$)、残差分析 (5%を基準) を行ったところクラスター1で女性が、クラスター3で男性が多いことが明らかになった。

Table 5 専攻別の各クラスターの人数

	文系											
	文系		理系		看護		教育		男性		女性	
クラスター1	136	(21.0)	51	(21.3)	9	(9.8)	22	(14.0)	33	(15.2)	103	(23.8)
クラスター2	48	(7.4)	23	(9.6)	4	(4.3)	4	(2.5)	19	(8.8)	29	(6.7)
クラスター3	53	(8.2)	16	(6.7)	1	(1.1)	12	(7.6)	27	(12.4)	26	(6.0)
クラスター4	123	(19.0)	43	(17.9)	19	(20.7)	36	(22.9)	36	(16.6)	87	(20.1)
クラスター5	58	(8.9)	33	(13.8)	13	(14.1)	10	(6.4)	21	(9.7)	37	(8.6)
クラスター6	59	(9.1)	15	(6.3)	18	(19.6)	29	(18.5)	14	(6.5)	45	(10.4)
クラスター7	93	(14.3)	41	(17.1)	15	(16.3)	25	(15.9)	33	(15.2)	60	(13.9)
クラスター8	79	(12.2)	18	(7.5)	13	(14.1)	19	(12.1)	34	(15.7)	45	(10.4)
合計	649	(100.0)	240	(100.0)	92	(100.0)	157	(100.0)	217	(100.0)	432	(100.0)

注) 括弧内の数値は%を示す。

職業観と職業不決断の関連

本研究においては、職業不決断の側面を把握するため、清水・花井 (2008) のキャリア意思決定尺度を用いた。1138名すべてを対象に探索的因子分析を行った結果、清水・花井とはほぼ同様な結果が得られたので、それにならって項目をまとめ、 α 係数および因子分析モデルでみた場合の信頼性である McDonald (1978, 1999) の ω 係数 (ω_h および ω_i) を算出した (psych パッケージ, omega のデフォルト設定)。またそれぞれについて専攻ごとにも信頼性係数を算出した。全体および専攻ごとのいずれにおいても障害不安のみ、特に ω_h の値が低めとなったが、 α 係数の値は先行研究とほぼ同等であり、また ω_i も .80 を越えているため信頼性が疑われるほどではない。そこで、7つの因子それぞれの得点 (5項目の合計) および標準偏差を算出した (Table 6)。

次に職業観の3側面とキャリア意思決定尺度7因子との相関係数を求めた。その結果を Table 7 に示す。経済的側面と「逃避」、個人的側面および社会的側面と「葛藤」「相談希求」の間では有意な相関関係は認められなかったが、それ以外においては有意な相関関係が得られた。Table 7 に認められる傾向をまとめると、概ね経済的側面を重視することは不決断の程度と弱い正の関係に、また個人的側面および社会的側面を重視することとは負の関係にあるといえよう。またそれほど明確な傾向とはいえないが、職業観は「不決断」「モラトリアム」「逃避」「決定不安」といった職業や職業を決めることから心理的距離を感じていることとの関連が相対的に強いと考えられる。

ところが Table 7 に示されるように、得られた相関係数は有意とはいえ値はそれほど高いものではない。これは職業観3側面それぞれと職業不決断の関連が、単純な相関関係ではないことを示唆するものかもしれない。そこで、先に行ったクラスター分析の結果を用い、それぞれのクラスターにおける不決断状態についての分析を行う。

8つのクラスターごとに、不決断得点の平均 (Table 8) を算出した。それを z 得点に換算しグラ

Table 6 職業不決断尺度の信頼性係数および平均, 標準偏差

	全体					文系			理系			看護			教育		
	α	ω_h	ω_t	平均	標準 偏差	α	ω_h	ω_t									
葛藤	.89	.87	.90	11.27	4.02	.88	.86	.90	.87	.80	.90	.90	.83	.93	.90	.84	.92
相談希求	.87	.78	.90	13.17	3.89	.86	.76	.90	.87	.81	.91	.85	.71	.90	.88	.82	.91
不決断	.94	.88	.95	11.90	4.77	.93	.83	.95	.92	.82	.95	.93	.89	.95	.93	.89	.95
モラトリアム	.90	.84	.92	10.35	4.53	.90	.81	.92	.90	.87	.92	.90	.76	.94	.91	.85	.94
決定不安	.89	.85	.92	14.43	4.16	.87	.82	.91	.89	.85	.91	.82	.79	.84	.89	.86	.91
逃避	.82	.76	.89	8.42	3.17	.81	.74	.88	.85	.78	.90	.86	.76	.92	.78	.70	.84
障害不安	.73	.58	.82	13.48	3.41	.73	.55	.83	.75	.59	.82	.75	.66	.86	.72	.45	.83

Table 7 職業認知的職業観と職業不決断の相関

	葛藤	相談希求	不決断	モラトリアム	決定不安	逃避	障害不安
経済的	.124 **	.138 **	.184 **	.132 **	.235 **	.048	.063 *
個人的	-.025	-.052	-.268 **	-.255 **	-.180 **	-.345 **	.069 *
社会的	-.042	.014	-.221 **	-.299 **	-.149 **	-.285 **	.125 **

注) * は5%水準, ** は1%水準で有意であることを示す。

Table 8 クラスターごとの不決断得点

	クラス ター 1	クラス ター 2	クラス ター 3	クラス ター 4	クラス ター 5	クラス ター 6	クラス ター 7	クラス ター 8
葛藤	11.44 (3.43)	11.51 (4.47)	11.90 (4.11)	11.44 (3.99)	11.14 (3.85)	9.81 (4.10)	11.62 (3.71)	11.17 (4.82)
相談希求	13.56 (3.56)	12.65 (4.08)	12.85 (4.51)	13.38 (3.74)	12.48 (3.97)	12.15 (3.98)	13.77 (3.39)	13.47 (4.37)
不決断	13.62 (4.37)	12.16 (5.08)	13.70 (4.68)	11.50 (4.59)	11.10 (4.36)	9.09 (4.02)	12.89 (4.62)	10.39 (4.87)
モラトリアム	11.64 (4.32)	10.95 (4.35)	13.56 (4.72)	8.94 (3.97)	10.48 (4.22)	8.19 (3.93)	11.39 (4.61)	8.70 (4.13)
決定不安	15.16 (3.59)	14.62 (4.40)	16.55 (3.58)	14.11 (3.96)	13.21 (3.92)	12.51 (4.40)	15.71 (3.86)	13.44 (4.61)
逃避	9.72 (3.06)	8.35 (3.49)	10.00 (3.93)	7.93 (2.69)	8.66 (3.19)	6.98 (2.53)	8.66 (3.00)	6.95 (2.72)
障害不安	13.00 (3.43)	12.85 (3.54)	12.80 (3.55)	13.73 (2.98)	13.35 (3.16)	13.16 (3.60)	14.42 (3.16)	13.81 (3.95)

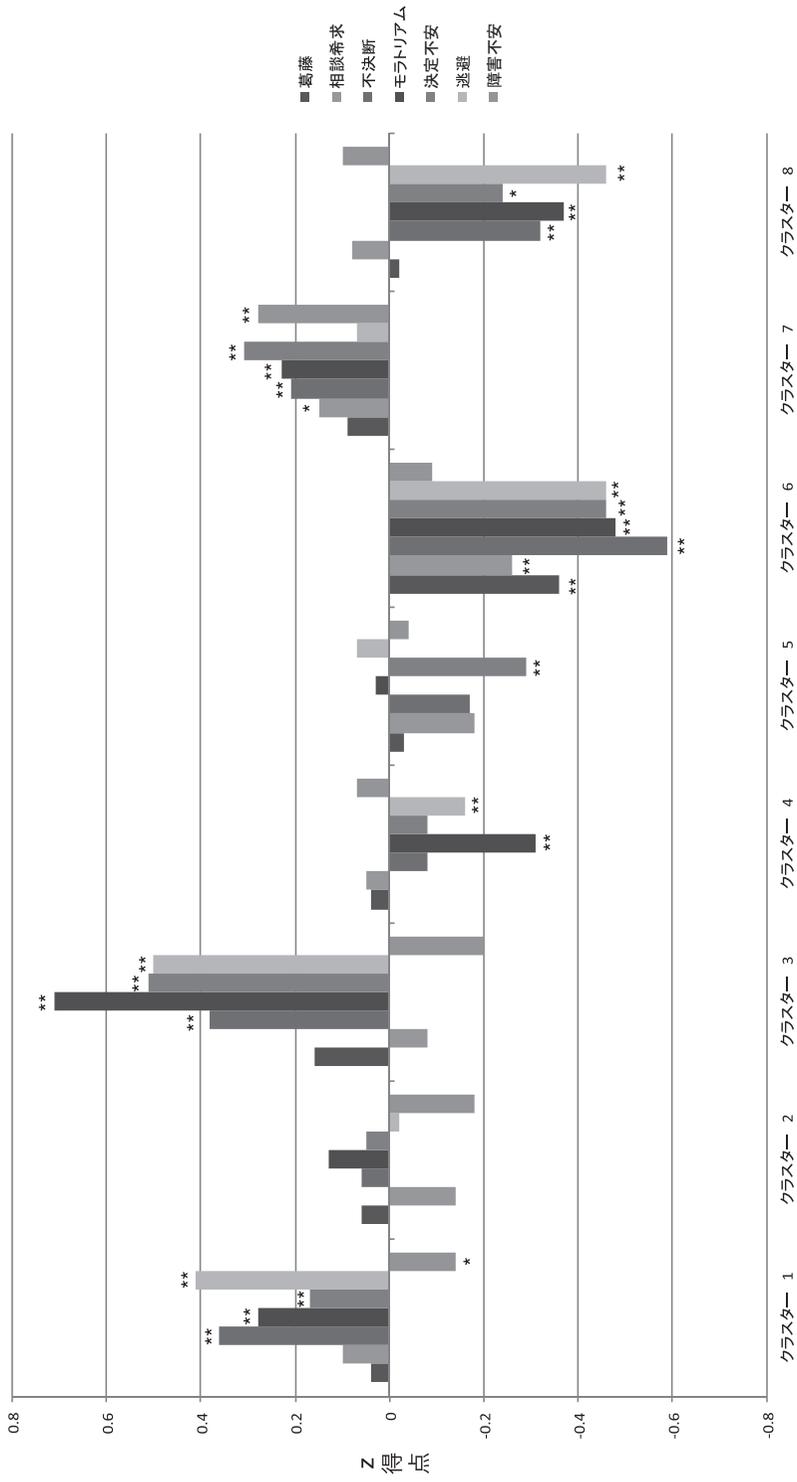


Figure 2 クラスターごとの標準化された不決断得点
 注) *は平均からの差の t 検定結果。* $p < .05$, ** $p < .01$

フ化したものが Figure 2 である。さらにすべての不決断得点について、全対象者の平均値と各クラスターの平均値との t 検定を行った。その結果も Figure 2 にあわせて記述している。なお、いずれの不決断得点においても、クラスターを要因とした 1 要因分散分析の結果、1%水準の有意差が認められている。

Figure 2 より、全体的傾向として、クラスターごとの不決断の特徴は、その程度にあるといえよう。すなわち、同一クラスター内に不決断傾向の高い側面と低い側面が混在するということは少なく、クラスターごとで一貫して不決断が高い、もしくは低いという傾向がうかがわれる。このことは、職業観が全体的な不決断の傾向と関連していることを示すものと考えられる。また Table 8 や Figure 2 より、不決断の各側面の様相は、クラスター間で差異があることも把握できる。「モラトリアム」や「不決断」、「決定不安」などは相対的にクラスター間の差異が大きい側面といえよう。他方で「相談不安」や「障害」「葛藤」などはクラスター間の差異が小さい側面である。

それぞれのクラスターの特徴を検討すると、クラスター 6 や 8 は不決断傾向が低いことを指摘できる。クラスター 6 では、7 つの不決断指標のうち 6 つが、クラスター 8 では 4 つが全体の平均値よりも有意に低い値であった。またクラスター 2 や 5 はほぼ平均的であり、クラスター 7, 1, 3 などが不決断傾向が強いといえよう。ただし、クラスター 7 や 1 は、不決断の多くの側面において不決断傾向が高いが、その程度はクラスター 3 より低く、逆にクラスター 3 は「モラトリアム」「決定不安」「逃避」などの側面が特徴的に高いという違いが認められる。

考察

本研究では、尾高 (1941) による職業の定義を用いて大学生の職業観を把握することを目的のひとつとした。尾高に従い、職業観を、経済的側面、個人的側面、社会的側面を持つ職業に対する重要性の認識ととらえ、これら 3 側面を測定する指標を準備した。そしてクラスター分析を用い、3 つの側面に対する重要性のバランスから 8 つのタイプを導くことができた。さらにこの職業観が職業不決断とどのように関連しているかについて探索的に検討した。

まず大学生の職業観の様相について検討する。経済的側面、個人的側面、社会的側面の得点分布状況などから平均的な職業観をえがくと、経済的側面の重視度が他の側面より高いこと、個人的側面と社会的側面の程度はほぼ同程度であるが、若干個人的側面の方が高いとまとめることができよう。このような傾向は、「第 8 回世界青年意識調査」(内閣府, 2009) にもみられる。同調査においては、職業選択時の重視点が問われているが、「収入」は 67.8%、「自分を生かすこと」40.8%、「仕事の社会的意義」15.6%という選択率であった。本研究とは教示、回答方法、対象等多くの点で異なるが、我が国の大学生を含む青年の特徴として、職業に対する価値付けは、重視するものから経済的側面、個人的側面、社会的側面の順であるとまとめられよう。

さらに職業観の得点によって対象者を分類したところ、8 つのクラスターに分けることができた。たとえば畔上 (1953) は、個人本位、社会本位、職業本位という概念的な典型的職業観の存在を仮定しつつ、実際にはそれらの中間的なものが多数存在するだろうとしている。本研究においては経済的、個人的、社会的の 3 側面から価値観をとらえたことから、畔上のいうような典型的な価値観とは経済的、個人的、社会的のいずれかのみが他よりも高いものものを指そう。しかし本研究では、そのような典型的なものとしては経済的側面のみが高いクラスター (クラスター 3) しか抽出

されず、またその割合も全体の1割に満たない。このことより、畔上の表現を借りれば、「中間的なもの」が大学生の特徴的な価値観といえるのではないだろうか。また8つのクラスターには人数比率に違いがあるが、極端な差があるわけではない。これは大学生を職業観の観点からみると、特段の多数派が存在するわけではなく、多様なタイプから構成されていると考えられる。

次に、職業観と職業不決断との関連について検討する。職業観と職業不決断の各側面の相関係数を求めたところ、一部に有意ではあるが弱い関連性が認められた。また8つのクラスターごとに職業不決断の各側面の得点を比較検討し、クラスター6や8は全体的に不決断傾向が低く、クラスター7, 1, 3などが高いことが明らかになった。本研究では職業観と職業不決断の間に何らかの関連があるものとして探索的に検討したが、これらの結果は、その間の関連性の存在を支持するものといえよう。

さらに職業観は、職業不決断の多くの側面と関連するようであるが、特に「モラトリアム」「不決断」「決定不安」「逃避」などの側面との関連が強いことも明らかとなった。職業不決断の測定に用いたキャリア意思決定尺度の7因子間の構造に関しては、すでに清水らによって検討されている(花井・清水・山本, 2006; 清水・花井, 2008など)。その構造の中では、「不決断」「決定不安」は最も根幹的な部分に、「モラトリアム」や「逃避」は他の因子に影響を受ける部分に位置する要因である。すなわち、職業観はキャリア意思決定の構造の中核部分と周辺部分との関連が強いといえる。なぜ中核部分と周辺部分をつなぐ部分との関連が弱く、他の部分との関連が明確なのかを検討することは興味深いだが、本研究では十分に応えることができない。今後の研究が期待される点といえよう。

さて、本研究では職業観と職業不決断の関連性に関して、相関係数とクラスター間の相違という異なった視点からの分析を行った。そして、それらの結果は整合するものとはいえないものであった。相関係数からは、経済的側面を重視することは不決断と弱い正の関係に、また個人的側面および社会的側面を重視することとは負の関係にあることが示される。これを用いれば、たとえばクラスター3の不決断傾向の高さ、またクラスター6の低さは説明できる。しかし、クラスター8で不決断傾向が低いことや、クラスター5が平均的な不決断の程度であることは説明し難い。職業観の3側面ごとに職業不決断との関連を検討することを不適当とはいえないが、あくまでも全体的傾向の概要を記述することに留まるであろう。尾高(1941)の表現でいえば3側面の調和、すなわちバランスの点が職業不決断と関連していると考えの方が適切といえるだろう。

そこで次に、3側面のバランスという観点から職業不決断との関連を考察する。何度も指摘しているように、不決断の程度が低いクラスターは6や8である。クラスター6の職業観は、他のクラスターと違い、経済的側面が他より低く、個人的側面、社会的側面の順に高くなるという点にある。これは、3側面と不決断の相関からも説明できる。他方、クラスター8はすべての側面で極めて得点が高いところが特徴である。その中央値は、経済的側面と社会的側面で10点、個人的側面で9点である。こちらは相関では説明が難しい。クラスター6と8の共通点を検討すると、個人的側面と社会的側面、特に社会的側面の得点が高いことを指摘できる。経済的側面の重視度がどうであれ、この点が不決断の程度を低減していると考えられるのではないだろうか。梅澤(2008)や浦上(2008, 2010)が指摘する問題点は、この職業の社会的側面に関わるものであった。職業を社会の中で分担すべき自らの役割として認識することは、不決断に陥ることを防ぐのではないかと推測できよう。

他方、職業不決断の程度が高いと考えられるクラスターは、3や1, 7である。これらには共通して、経済的側面の値が他の2側面より高いという共通点がある。その差が極端なパターンがクラ

スター3に認められるが、このクラスターが最も不決断の傾向が強い。その差が少し小さい場合(個人的側面と社会的側面の値がクラスター3より少し高い)がクラスター7、さらにクラスター7より3側面すべての値が少し下がった場合がクラスター1である。これらのことから、単に経済的側面に高い価値を認めているだけではなく、それが若干低くても、他の2側面に認める価値の程度がそれよりさらに低ければ不決断傾向が高まると考えられる。浦上(2010)は、国語辞典では多くの場合で「職業」に対して「生計を立てるための仕事」という説明がなされているが、キャリア支援等の観点から職業を考える際の適当な参照先とはいいい難いと指摘している。今回の結果はその指摘を支持するものともいえよう。国語辞典的な意味のみとして職業を認識することは、職業の選択を困難にするかもしれない。

ところが、以上のような解釈ではクラスター2の様相を十分に説明することができない。このクラスターは経済的側面を重視する程度が高く社会的側面が非常に低いが、個人的側面の重視度は高いというパターンである。なお個人的側面と社会的側面の相関係数は.521と比較的高い値であり、他のクラスターでもこの2側面の差異はそれほど大きくはない。その2側面間に大きな差異が認められるのは、このクラスターだけの特徴である。社会的側面の認識が低く、職業を収入と自分の力を発揮する場としてとらえる、いわば自己中心的な職業観とみなすことができよう。ところが、このクラスターの不決断の程度は平均的なものである。この特徴は興味深いが、それを検討するにはまだ情報が不十分であろう。

残るクラスター4および5は、平均よりも高い不決断の側面は認められないが、低い側面も少ない。全体的にとらえると、クラスター2と同様、平均的な不決断の程度といえる。クラスター4および5に共通する職業観は、3側面の重視度が同程度という点にある。これはクラスター8にも認められる点であるが、それより全体的に少し低い場合がクラスター4、さらにいずれの側面においても価値付けがかなり低いのがクラスター5である。クラスター8も含め、3側面の重視度が同程度であることは、不決断を強めることはないと考えられる。

しかし、一般的に考えるとクラスター5のように職業に対して全般的に価値を認めていない場合、積極的に職業選択には向かえないと推測することが妥当ではないだろうか。ところが今回の結果は、この推測を支持するものではない。ではなぜクラスター5の不決断の程度は平均的なのだろうか。価値を認めていないことは、期待もしていないことにつながるだろう。それゆえ、その活動がうまく進むかどうかは不明であるが、職業に対する期待がなければ気負うことなく就職活動に向かえるのかもしれない。また本研究では不決断を職業観という要因のみからとらえており、それ以外の要因を考慮していない。もしかすると、職業に価値を置かず、たとえば義務感のようなものから職業選択に向かっているのかもしれない。このあたりはさらなる検討が必要である。

職業観は価値観の一側面でもあり、その良否を判断することは難しい。しかし、職業不決断との関連から考えれば、個人的側面や社会的側面の重視度が高い方が不決断になりにくいことを指摘できる。換言すれば、経済的側面の重視度が他よりも明らかに高いような場合は、不決断に陥りやすいということである。職業という概念を国語辞典的にとらえることは間違いではないが、たとえばキャリア教育の文脈で扱う場合には、個人的側面や社会的側面の理解、重要性の認識に配慮することが重要になることを本研究は示していると考えられる。

また3側面の重視度が同程度であれば、たとえそれが低くても不決断の程度はあまり高くなかった。そのため、不決断の程度だけから考えれば、職業に価値を与えていないことは取り上げて問題視すべき点ではない。しかし、就職活動中にも、また入社後も、広義の職業観は内定取得や適応に

重要な要因となるため（たとえば、国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2002），このようなタイプの職業観を問題視しないわけにもいかない。今後は他の指標との関連や縦断的な検討も必要だろう。

今回の研究では、職業観に専攻差や性差があることが示唆されたが、分析に十分なサンプル数が確保できなかったため、どのような差異があるのかを明らかにすることはできなかった。また専攻差は、中学、高校といった段階で形成された職業観に影響を受けているものと考えられる。今後はさらに対象を広げ、また発達の変化も考慮に入れた検討が求められよう。

文献

- 畔上久雄 1953 職業観の発達 阪本一郎・中野佐三・波多野完治・依田 新（編）教育心理学講座 6 職業指導の心理 金子書房 pp. 167-225.
- Crites, J. O. 1981 *Career counseling*. N. Y.: McGraw-Hill.
- 藤本喜八 1991 進路指導論 恒星社厚生閣
- 花井洋子・清水和秋 2006 進路選択における不決断・効力感尺度—SEMによるモデル化— 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1358.
- 花井洋子・清水和秋・山本理恵 2006 キャリア自己効力感尺度の開発—キャリア不決断尺度と Big Five との SEMによるモデル化— 日本キャリア教育学会第28回大会発表論文集, 94-95.
- 広井 甫 1962 職業価値感の研究：展望と考察 職業科学, 3, 69-87.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について 2002年11月 <<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>>
- 久世敏雄 2000 青年期とは 久世敏雄・齋藤耕二（監修）青年心理学事典 福村出版 pp. 4-5.
- 松本浩司 2008 高校生の職業観の構造と形成要因：職業モデルとの関連を中心に キャリア教育研究, 26, 57-67.
- McDonald, R. P. 1978 Generalizability in factorable domains: "Domain validity and generalizability": 1. *Educational and Psychological Measurement*, 38, 75-79.
- McDonald, R. P. 1999 *Test theory: A unified treatment*. N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 内閣府 2009 第8回 世界青年意識調査 (<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>)
- 尾高邦雄 1941 職業社会学 岩波書店
- 大山七穂 1990 価値と規範 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編）社会心理学パースペクティブ3 誠信書房 pp. 237-262.
- 清水和秋 1983 職業的意思決定と不決断 関西大学社会学部紀要, 14(2), 203-222.
- 清水和秋 1989 中学生を対象とした進路不決断尺度の因子的不変性について—COSANを使用して— 関西大学社会学部紀要, 21, 143-176.
- 清水和秋・花井洋子 2007 キャリア意思決定尺度の開発—その1：大学生を対象とした探索的因子分析から尺度構成— 関西大学社会学部紀要, 38(3), 97-118.
- 清水和秋・花井洋子 2008 キャリア意思決定の安定性と変化そして不安との関連—大学1・2年生を対象とした半年間隔での縦断調査から— キャリア教育研究, 26, 19-30.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 梅澤 正 2008 職業とはなにか 講談社現代新書
- 浦上昌則 2008 下村・白井・川崎・若松・安達論文へのコメント—「社会」という言葉に着目して— 青年心理学研究, 20, 101-108.
- 浦上昌則 2010 キャリア教育へのセカンド・オピニオン 北大路書房

Williamson, E. G. 1939 *How to counsel students: A manual of techniques for clinical counselors*. N. Y.: McGraw-Hill.

若松養亮 2012 大学生におけるキャリア選択の遅延：そのメカニズムと支援 風間書房